

インドネシア中部ジャワ州の古都ソロ市(スラカルタ市)は、日本の古都奈良に似た雰囲気落ち着いた町である。この町を西から東へ流れるソロ河(ブンガワン・ソロ、ブンガワンはジャワ語で大河の意、クロンチョンの頃は日本でも有名)は全長540kmのジャワ島最長河川で河口のスラバヤ市を経てジャワ海に注いでいる。ソロ河はまた洪水氾濫河川でもあり、その対策は喫緊の課題であった。

新装開港直後のチャンギ国際空港を経由、家族を伴いソロ市に赴任したのが1980年でその後5年間をこの町で過ごすこととなった。約30年経過後の昨年業務で再訪、古い記憶を頼りに当時は振り返ってみたい。

ウオノギリ多目的ダムは、ソロ河上流域のウオノギリに我が国有償資金協力により建設された下り役割を持った多目的ダムである。

- ソロ市を中心とする地域の洪水調整
- ウオノギリ灌漑システム、3万ha
- 下流5県の揚水灌漑対象地の灌漑
- 12.4MWの発電
- 周辺3県への生活用水供給
- グレスック市への工業用水供給

ダム型式は、次のとおりである。

ダム型式:中央遮水壁型ロックフィルタイプ  
 ダム高:40m  
 堤長:830m  
 総貯水容量:7億3500万m<sup>3</sup>

本事業は、1970年代にその事業実施可能性(FS)調査、実施設計を経て'70年代後半に工事着工、ダムは1982年、下流灌漑システムは1984年にその完成をみている。有償資金協力額は、工事資金、大型の工事に用いた施工機械調達費用50億円を含めてこれこれ200億円程と記憶する。事業の実施機関は公共事業省、ソロ河総合開発事務所、工事実施形態であるがダムは直営工事、下流3万ha灌漑システムは国際入札の結果インドネシア業者の実施となった。事業実施形態は工事の施工監理にコンサルタントを起用する3者方式である。直営方式を採用したのは、プランタス河の開発実績が大きく影響した事と当時のインドネシア・ゼネコンの体力を考慮したものと考えられる。本事業のダム及び灌漑工事は、プランタス河開発に続き、以下の点でまさしく日本の開発途上国に対する総合的な技術協力の典型といえるかも知れない。

其の1:ODAによる我が国の資金協力

其の2:本邦コンサルタントによる一貫した調査・設計及び施工監理

其の3:ガイダンス・エンジニアによる土木工事直接指導

上記3点で特筆すべきは、ガイダンス・エンジニアの存在・役割である。工事のピーク時には総勢50名程がウオノギリの町に建設された宿舎で本邦コンサルタントと共に寝食を共にして土木工事の施工指導、機械化施工、重機運転・修理、資機材調達など、直営職員や現地雇用エンジニア、職人、運転工、機械工、電気工の指導を行い、工期どおりに事業の竣工を迎えたことである。彼らガイダンス・エンジニアはその多くが日本の大手ゼネコンのもと御母衣ダム、九頭竜ダム他大ダムの施工経験者である。



沖縄出身の方々が多かったのも特徴であるが、そのことは次の理由によるものと考えられる。ブルドーザやダンプトラック等大型の重機・施工機械による日本の本格的な機械化施工は上記大型ダム工実施の頃が初期と言えるがこれら工事には多くの沖縄出身者が従事しており、彼らはアメリカ進駐軍が沖縄で実施した大型土木工事の機械化施工経験者である。彼らは、沖縄・本邦・そして途上国でその技術を大いに生かした功労者と言えよう。技術協力に於ける“輪廻”を彷彿させる事柄であり、尊敬に値する。

常駐コンサルタントとしての小生の役割であるが、要約以下のように整理される。

### 1. 機械化施工計画と施工監理

ダム・灌漑施設土木工事の施工計画の立案と施工監理。大型の土工・コンクリート工事が主な対象。メーカーの協力のもと大型スクレーパー他重機の実地運転指導など灌漑施設の本格着工前に実施。

### 2. 工事費積算

### 3. 施工機械の貸与契約監理と貸与承認

有償資金協力で調達の150台余はダム工事に使用、その後灌漑工事に転用、請負業者に貸与。

### 4. 修理工場監理

### 5. 部品調達と請負業者への支給可否承認

### 6. 公共事業省ソロ河開発事務所職員への技術移転

### 7. JBIC提出報告書・書類作成

さて、ダム・灌漑工事はかれこれ8年程の工期であったが、ソロ市・ウオノギリ在留の我々日本人は、日本の行事を大切に節目には寄り集まって祝い事などを催したものである。正月祝い、七夕祭り、盆踊り、ゴルフコンペ、ソフトボール大会等等本邦滞在時以上に催したものである。又、ポロブドール、プランバナ、ジャワ原人発掘跡などの遺跡見学も貴重な思い出である。

昨年現地を再訪問のおり、約30年経過後の諸施設を視察した。ダム上流域の農地開発に起因する貯水池の堆砂対策を日本ODAより実施中であった。灌漑施設は概ね問題なく豊かな水田が広がっている。



赴任時家族3名帰国時5名。ソロの現地小学校に通っていた長男、ソロ生誕の二男と長女、共に成人、素直に育って自立していることを亡き妻に報告・感謝しつつ筆をおくこととします。

以上